



Examination of the relationship between postoperative quality of life and gastric emptying function after pylorus-preserving gastrectomy and distal gastrectomy

著者名	金島 研大
発行年	2016-11-18
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032146

主論文の要旨

Examination of the relationship between postoperative quality of life and gastric emptying function after pylorus-preserving gastrectomy and distal gastrectomy (PPG と DGR における術後 QOL と残胃排出能の関連性についての検討)

東京女子医科大学外科学（第二）教室

（指導：岡本 高宏教授）

金島 研大

International Surgery 第 100 巻 第 11-12 号 1429 頁～1434 頁に掲載

【要 旨】

近年、胃体部に発生する早期胃癌に対し、機能温存を目的として、pylorus-preserving gastrectomy (以下 PPG) が広く行われる。経験的に、Distal gastrectomy (以下 DGR) に比較して PPG の術後 QOL が良好であることは広く知られている。それらは術後の胃排出能の差が一因であるとも言われている。他方、13C 呼気試験法胃排出機能検査（以下 13C 法）は、胃排出異常に対し、非侵襲的かつ簡便に行える、信頼性の高い臨床的胃排出機能検査として注目されている。今回我々は、当科で PPG または DGR (Billroth I 再建) を行った PPG23 例および DGR37 例の計 60 例に対し 13C 法および、アンケート調査(包括的 QOL 評価として SF-36、疾患特異的 QOL 評価として GSRS)を行うことにより、PPG と DGR の術後 QOL を胃排出能との関連から比較、検討した。尚、13C 法においては 13C02 の濃度がピークに達するまでの時間 (Tmax) は胃排出速度の指標であり、

それを測定した。SF36の結果では、12ヶ月までは2項目でPPGが良好であったが以後は両術式ともに差はなくなった。GSRSの各項目は術式間で比較すると、12か月以降において、PPGで点数が低く良好な傾向があった。Tmaxの差は12か月以後には有意に広がった。胃排出能は全体的なQOLには影響を与えないが、疾患特異的QOLには影響を与えられたと考えられた。